

せきをむく

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第十四号（毎月一日発行）
平成二年十一月一日

『古平』という地名

近藤芳二

次に古平についての主な説を、箇条書きにまとめてみた。

<p>松浦武四郎</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 此ところ本名はチョヘタナイにて、「フルピラ」は、このうしろの川の名なり。 ● 古平は川の兩岸赤崩平の義也と。さすれば、古平川の南の崩岸を指しての言といえり、いかにも左様思わる也。
<p>上原熊次郎</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 「フルピラ」は夷語「クルピラ」なり。クル〓模様・形、「ピラ」〓崩れたる岩山、「即ち模様ある岩山」と説明している。（くる〓模様亦是形などと申す意）
<p>永田 方正</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 「フレイピラ」赤崖ノ義、以テ川ニ名ク上流ニ、「ホロカフルピラ」アリ、逆流赤崖ノ義、此地アイヌノ発音ホドント「フルピラ」ト聞ユルヲ以テ誤ルナリ。

上の表を整理して、次のようにまとめてみた。

● 松浦説

フルピラ（丘の・崖）丸山
あたりの地名か。

（『西蝦夷日誌』で、土人の言として）
フウレピラ（赤い・崖）古

平川の南の崩岸を指しての言か。

● 上原説

フルピラを、クルピラ（模様ある山）

● 永田説

フレイピラ（赤い崖）、松浦説の一方の説をとる。

ここで興味をもっていることは、松浦氏は「フルピラは、このうしろの川の名なり。」と記している。

また永田氏は、「ホロカフルピラ」あり。アイヌは「フルピラ」と発音しているということである。

—— つづく ——

鯨のうろこ

「オイオイ、見れでエー
あの、おガミさん。鯨のうろ
ごばア、はだけるでエ。
鯨のこさえ方も知らねんだも
な」

よそから来た若い奥さんが
井戸端で、鯨をこしらえている
のを見て、通りがかりの若
いヤン衆たちが笑って行く。

たいていの魚はうろこをとる
が、鯨はうろこを大事にする。

うろこの無い鯨、たとえば、
梓の中でもまれてうろこの取れ

た鯨は、「バクチ鯨」とい
って漁場では嫌われる。賭
博に負けて、裸にされたと
いう意味である。

身欠鯨などは、うろこが
ピカピカ光っているものに
「一等検印」がつく。

古平産の身欠鯨は、陸に
揚げてからの処理が適切で
仕上げも丁寧だったことが
ら評判が良く、高い値段で取り
引きされていた。

この自然が悪童の友だち

それはそれは、昔のことだつた。

旧古平小学校裏（正隆寺前）の遊び場には、岩盤の出ている小山があつて、まだ整地はされていかなかった。そこへ行くと、カナヘビとも赤腹トカゲともいってた、

四、五センチほどの小さくて逃げ足の早い、よく走り回る動物がいた。

二、三人の悪童と追ひ回しては遊んだ記憶がある。たまたましつぽをつかむと、自分のしつぽ



福井幸平

を切り離してスリリと逃げてしまふ。足が四本だったか、六本だったか今もつてわからない。

その後、整地されてからは、そこでドッジボールや野球の真似ごとみたいなことをして遊んでいた。

墓場へ行く道（禅源寺寄り）

に大きな防火用水があつたがその水で粘土をこねて、直径五十センチぐらいの泥

の土俵をつくり、コゲ遊び（太さ二・五センチ、長さ二五〜三十センチの先を削った棒切れを地面に投げて刺す）をした。

一人が二、三本づつ持っていて、最初の一人が力いっぱい投

げて地面に刺す。次に、その棒の横腹をこするようによくクロスに投げ、相手の棒を倒す遊びである。しかし、ただぶつつけて倒すだけでは駄目で、投げた方の棒が、地面に刺さっていないと無効なのである。なんと単純明快で、しかも豪快な遊びであることか。

勿論、飛び散る泥で汚れるが五、六人でやっているともう夢中で、興奮しながらやったものである。

「コゲ」という語源は今もつてわからない。しかし、相手のコゲを目がけて、カーンという

本名・佐藤智恵子、旧姓・和田、入船町に生まれる。父は勘右衛門といひ、練場を経営していたが、大正八年、練漁に見切りをつけて一家で東京へ移住した。智恵子が五歳の時であった。

府立高等女学校から、駿河台女学院英文科に進み、卒業後、歌人・太田水穂の門に入り、「潮音」の同人となる。歌集や随筆が多いが、随筆『硝子箱の人形』の中で、念願の故郷・古平を訪ねたこと、そして、巡り合った人たちとの思い出を書いている。

ある時、一穂が、「智恵が、海で溺れているところをオレが助けてやった。でなければ、今のこんな美人はいなかった。」と。

音をたてて倒す快感がたまらなく、次第に闘争心がわいてきて時間のたつのも忘れて遊んだ。今思い出しても懐かしく、素朴なゲームだった。

昔も「一村一品」？

身欠鯨を縛っているシナ皮をホソメコンブに代えたところ、「昆布も食べられる」というので本州方面では喜ばれた。しかし、「食えなくてもやっぱりシナ皮でない」とと、せっかくのアイデアも駄目だったという。

「一村一品」を成功させるのは、昔も今も容易ではない。

短歌

和田智恵

ろうそく岩 セタカムイ岬古平の

浜辺に立ちて母恋う吾れは

生きたあわび歯にかみしめて涙ふく

故郷の味古平の浜

浜風にりんごの花のふかれ居り

古平はわれの産まれしところ

（古平高校生徒会誌第三号・昭和三十七年）

『海獣が首をもたげて、波に吼えている石像のセタカムイ、太古の天を指す蠟燭岩の海の牙、湾深く碧瑠璃の海水を湛えて、ここ古丹に白鳥のまぼろしを見る』

海越して旧知に送る

吉田一穂

(古平小学校開校九十周年記念誌寄稿『白鳥古丹』より)

せたかむい

創刊一周年を迎えて

昨年十一月、歴史のある(古平)という私達の郷土を広く知ってもらい、そして、町史の編さんに皆さんからのご協力ご援助をいただきたい——という願いをこめて、『せたかむい』を発刊しました。幸いにご支持を得て、四百部にまで成長しました。一周年を迎えた今、紙名『せたかむい』にちなんで、特集ページを組んでみました。今後もいっそうのご愛読をお願いいたします。

説 伝 セタカムイ

三年 佐々木 淑子

昔、古平には百五十人ほどのアイヌの集落がありました。今日もまた、アイヌの若者たちが沖へ漁に出かけました。海は鏡のように穏やかで、空は青く晴

れ渡っていました。好漁で、やがて陽が落ちて帰るころになると、風が始め、またたく間に水平線から黒雲が沸きおこり、激しい風雨が襲って来たのです。若者は獲物も捨て、風浪と必死にたたかいましたが、やがて力尽き、舟も壊れ、漁に出ていた仲間の多くと共に波間に消

えたのでした。

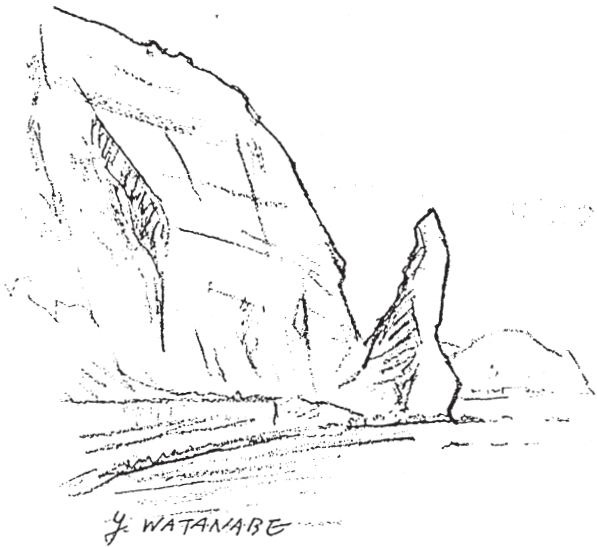
一方陸では、家族や多くの村人がかがり火を焚き、無事と帰りを待っていました。けれども暴風雨はますます荒れ狂うばかりです。そのうち、難を逃れた若者たちが岸にたどりつきました。しかし、じっと待っていた一匹の犬の主人は、いつまで待ってもついに帰っては来ませんでした。

この犬は帰らぬ主人を待ち続け、低くそして遠く、いつまでもいつまでも吠え続けていたのです。

やがてこの犬は、ひたすら待ち続けたままその姿は岩と化し、神となり、天に在る主人の許へと行ったのです。そのことがあつてから、この岩の名は、

「セタカムイ」(犬・神)と名付けられ、今なお悲しげに、帰らぬ主人を呼んでいるかのよう

に海に向かっています。また、近くにあるローソク岩は、船が暴風雨に遭った時にはその尖端にかすかに火が見える、という言え伝えがあります。(古平高等学校生徒会誌『白鳥古丹』第二号・昭和三二年)



[セタカムイ] 絵・渡辺嘉之

のあそび むかしの



本間 銀 朔

私たちが小学生のころの「遊び」を、懐かしく思い出しながら、少し書いてみることにしました。

「パッチ」今の子どもたちは「メンコ」といつている。直径が五センチぐらいから、大きいものになると二十センチぐらいもあった。それには、楠木正成、八幡太郎義家、木曾義仲、巴御前、源義経、弁慶などが、と言ってみても、今の子どもたちにはなじみがないと思うが、ともかく数多くのものが極彩色で印刷され、奇麗なものだった。

家の中では座布団を使ってや

り、相手の「パッチ」をひっくり返したり、座布団から落とすと相手のが取れた。外で遊ぶ時は板切れを使ったが、これが「パッチ」の土俵になった。ツメコというのもやった。「パッチ」の端に相手の「パッチ」を乗せて、親指ではねてひっ



「△今月の出来事」に代えて

【今日はこんな日】を連載

昨年十一月に発刊以来、昭和元年から（嚙五十年まで）その月にあった主な事項を、「今月の出来事」として紹介してきましたが、十月でひととおり終わりました。今月からは新しく、その月にあった大きな出来事にスポットを当ててみることにしました。「こんなこともあったか」と、思い出す方もいるでしょう。

★余市高等学校古平分校開校

「オラガ町にも高校が」

いくつかの裸電球が天井からぶら下がり、すき間風の入る教室の中で、石炭ストーブがあかあかと燃えている。

くり返すとそれを貰える。うまくなると、小さいので相手の大きいのが取れるようになる。お互い取ったり取られたり、時には口げんかも始まるが、こんな遊びでも結構楽しく、皆夢中になって遊んだものだ。

つづく

中学校を卒業したばかりの年齢から四十代までの、緊張した顔が並び、高校への大きな期待感に満ちていた。

これは、昭和二十三年十一月十五日、古平町に夜間・定時制高等学校が誕生した、その入学式の日のことである。

交通が不便なことから、進学には金がかかった。この年の四月、古平中学校を卒業して高校に進学したのは、八十二人のうち僅か八人に過ぎなかった。青少年に勉学への道を開き、郷土の人材育成を願い、定時制高校を誘致しようという運動が時勢として盛り上がった。町を挙げての熱烈な陳情が実を結び、ここに宿願の、北海道庁立余市高等学校古平分校（夜間定時制）の開校をみることになったのである。

勉学を志す者にとって、この町に高校のできた喜びは大きかった。八十九人が受験し、六十七人が喜びの入学を果たした。同窓会長の関川克己さんは、十五周年記念生徒会誌に、

「…年齢差も大きかったが、職業も、役場吏員、警察官、教員、郵便局員、漁協職員、自営や家事と様々だった。（略）しかし、働きながらの勉学の道は厳しかった」と書いている。晴れの第一回卒業生は、男子のみの八人であった。